

「踊り／関わり 佐久間新の鏡」(仮)

富田大介

「佐久間新と対面で踊ったり、客席で向き合ったりしたことのある人なら感じているだろうが、彼は私たちの内に踊りを興しやすい。それは佐久間がジャワ古典舞踊の教えを通じて「どうやったら相手に真似て(踊って)もらえるか」を追求してきたことによる。伝統芸能の急所というべきこの「感応的契機(感じること)」の研究は、舞踊もさることながら、あらゆる美学の基礎に関わる。¹⁾

「本人は踊りに入る時間を「(ラジオの)チューニング」に警える。自身の感覚針を環境の運動に触れ合わせてゆくこと。彼の踊りに向き合うと、何か細かい粒の流れがこちらに届いては、それが体の内側で振るえることがあるが、それもこの触診に派生する作用なのだろう。²⁾

「[...]今まで即興演奏は自分で音を足して行って音で絵を描く感覚で聞いていたんですが、長年佐久間さんのワークショップを受けていた影響なのか、急に音と一緒に動きたくなくて、自分が動いている姿が目に見えだるんですよ。今まで全く動きたくないなんて思わなかったのに、すごいなって。実際にはなかなかそのイメージ通りに動けないから、動けなかったんですけど。「ああもっと動きたい」「動けるようになりたい」って思いました。今までそんなこと感じたこと無かったんですけどね。動きたいという衝動と動いているイメージが視覚化されたんです。「ダンス」を使わずに言ったらこういう感じになりました。³⁾

ここに抜粋したのは、以前に私が佐久間の踊りの性質を伝えようとして書いた文、ならびに、佐久間をよく知る音楽家で臨床哲学者のほんまなほが、彼からの影響を言い表したものである—それはダンスについて深く考えるため「ダンス」という言葉を使わずに「あの体験はなんだったんだろう」を話そうとして発せられたものである。今回のシンポジウムでは、これらの記述をほぐしながら、話題を提供したい。今日、古典舞踊に限らず、現代舞踊の文脈でもダンスやダンス作品の継承が問われ、(再び)「模倣」に関して考えさせられることが多くなったように思う。真似ることや倣うことの考察については、

¹⁾ Cf. 富田大介「共創の舞踊劇『だんだんたんぼに夜明かしカエル』(兵庫公演)について」『共創の舞踊劇『だんだんたんぼに夜明かしカエル』報告書』所収、一般財団法人たんぼの家、2019年、p.27。この文には以下の脚注を付けた：
「Cf. Gilles Deleuze, *Francis Bacon Logique de la sensation*, p. 39-40, note 27, Seuil:Paris, 2002 (ジル・ドゥルーズ著、宇野邦一訳『フランシス・ベーコン 感覚の論理学』, p. 215-216, 注 27, 河出書房新社, 2016年)」

²⁾ Cf. 富田大介「未だ知らない持続に」、京都芸術センター通信「明倫 art」vol.159 (2013年8月号) 所収、京都芸術センター、p.3 (https://www.kac.or.jp/wp-content/uploads/1306_kacnews1308_web.pdf)

³⁾ Cf. 菊竹ともゆき編、「座談会 表現の救い ゲスト：ほんま なほ」『ダンスが生まれる回路研究プロジェクト』所収、社会福祉法人わたぼうしの会 たんぼの家アートセンター-HANA、2018年、p.70

殊、現代の振付家の仕事を論考する研究に限っても、舞踊学会の先達が秀逸な成果を残してきた⁴。そうした先例も念頭に置きながら、表題に掲げた切り口から、踊りが生じる条件や時間にふれてみたい。

富田大介（追手門学院大学社会学部准教授）

メッセ大学大学院、神戸大学大学院修了(学術博士)。大阪大学大学院国際公共政策研究科特任講師等を経て現職。専攻は美学・身体表現論。実作と理論を行き来しながら研究を進めている。主な著書に、太平洋諸地域の研究者や芸術家とのプロジェクトをまとめた『身体感覚の旅』(編著、大阪大学出版会、2017)、大学と地域をつなぐ実験の記録『待兼山少年』(共著、同、2016)等がある。近年は「災禍と表現」に関心を持ち、『RADIO AM 神戸 69 時間震災報道の記録』の上演やその報告などを行なっている。学術論文「土方巽の心身関係論」(『舞踊學』第 35 号)、「P・ヴァレリーにおける運動的陶醉のメカニズム」(『美学芸術学論集』第 6 号)、出演作品『PACIFIKMELTINGPOT』(2015-2018,城崎国際アートセンター,鳥の劇場,チバウ文化センター,ランス国立舞台劇場,ボビニーMC93 ほか)等。

⁴ 例えば「習う」ことに関しては武藤大祐氏、「引き込み現象」に関しては貫成人氏、「引用」に関しては外山紀久子氏の論考や書物を参照されたい。